

里川研究掲示板

当センターでは、「里川」というコンセプトについて研究活動をしています。
このコーナーでは、活動動向を随時お知らせしてまいります。

中間研究会開催

共同研究里川も開始後1年を迎えようとしています。このプロジェクトの特徴は、社員やセンタースタッフがボランティアに参加する「社会人提案型研究」ということです。2005年1月27日には、東京で中間研究会を開催し、沖大幹、嘉田由紀子、陣内秀信、鳥越皓之の4名の企画研究委員とディスカッションが行なわれました。



現在進行している研究は、地元の川に対する自己の記憶を掘り起こしたもののや、川辺の集客を問題に据えたもの、都市部における流れの再生を意図したものなど、バラエティーに富んだ研究群となっています。2005年度は、これを継続し、里川の意味を構成する予定です。



現在進行中の研究一覧

- 「庄内川水系における多自然型河川と里川の可能性」
- 「半田の隆盛を支えた半田運河（十ヶ川）の現代における地域住民との距離」
- 「なつかしい阿木川」
- 「身近な水収支の調査手法開発～半田市・阿久比川を題材に～」
- 「里川研究のための予備調査～研究内容の設定へ向けて～」
- 「働く人の水意識」
- 「里川・阿久比川流域の100年間の環境変遷」
- 「都市に暮らすOLの『水に関する意識』を探る～里川との接点はあるのか～」
- 「地域コミュニティとして、最小支流域は機能するか」
- 「上下水道技術に見る里川性—生活世界の技術論の可能性」

里川研究も中間地点にきたのを機に、企業人が市民研究に携わる意味について企画研究委員の嘉田由紀子さんに話していただきました。

里川研究という挑戦の意味
企業社員が川とかかわり、生活者度が上がる

嘉田由紀子



会社の中では、自分の関心を仕事に集中しないと社員の役割が果たせない。その自分の関心が、研究を通して、会社ではどのような文脈の中にあるのかを知ることは大きな意味がある。

研究に参加することで、社員は元気になる。逆に、そのような社員の自己実現の舞台を提供するのが、こうした研究の大きな意味でもある。さらに、好奇心に応じて仲間ができ、それが社会的な広がりを持つことも意義深い。

里川研究のように、企業の社員が楽しみながら川を調べようという活動は、挑戦的な試みだ。なぜなら、各人が仕事の中で得た技能とノウハウが、社会と接点を持ったとき異なる形で現れるからだ。例えば、営業で人つきあいがうまい人は、聞き取り調査を通じてどんどん友達をつくっていく。つまり、一人ひとりの能力、知識、記憶などを、仕事の現場とは異なる文脈の中に引き出すことができる研究で、単に「会社だけの試み」を超える可能性を持っている。

このような研究の第一のキーワード

は「引出しをたくさんつくろう」だ。人間の頭の中には、引出しがある。ただ、その引き出し方がわからない。引き出し方がうまくなるには、会社の外に一步出て、地域にとつての「よそ者」になってみることは大きな効果がある。実は、引出しと知恵をたくさん持つ人を「生活者」と呼ぶ。企業人が生活者になることが、今求められている。知恵とは、引出しを引っ張り出すソフト、状況に応じて自分の引出しを使いこなす能力のことだ。生活者になった度合いを「生活者度」と呼んでも面白いと思うが、その生活者度を上げていくことが、結局は企業の現場でプラスに働くことになる。

要は、企業人ではなく生活者として研究とかかわろうとすれば、必然的に生活者度も上がるし、知恵も増える。それが社員の全人的な自己実現につながる。そういう意味で、里川研究のスタイルは、会社とも適度な距離が保たれ、社会的な意味も追い求めた、面白い形だ。

(2005年2月4日・文責編集部)

■水の文化20号予告

特集「消防の文化」(仮)

都市防災のかなめは消防活動です
消防とは切っても切れない水
しかし、都市の消防インフラと水との関係は
生活者になかなか見えてきません
火を消し、火災を防ぐために
いま、どのような
活動が行なわれているのか
日本の消防文化とはどのようなものなのか
消防のいまを探ります



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介します。

ユニークな水の文化学習活動を行なっている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行なっている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにて、バックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク 秋の登場者

当センターホームページ・水の文化人ネットワークコーナー。以下の方々をアップロードいたします。

安達裕之 東京大学大学院総合文化研究科教授

井上章一 国際日本文化研究センター教授

佐藤洋一郎 総合地球環境学研究所教授

松田忠徳 旅行作家・札幌国際大学教授

山口仲美 埼玉大学教養学部教授

編集後記

◆ オランダの柔軟な思想は、どこか東洋思想に近いものを感じます。日本人にも東洋的な柔軟な思想が底流にあるはず。政府、企業、市民の中から、積極的な発想で、合意を取りまとめるリーダーを輩出させたいものです。(吉)

◆ 合意＝意思が一致することと広辞苑にある。「一致すること」と「一致させる」ことでは、大きく意味合いが変わってくる。建設的な対立が苦手なのは、社会的な習慣なのかも知れないが、合意形成に向けて「ファシリテーション」技術の習得にでも励むことにしよう。(新)

◆ アムステルダムの街は、決して車優先の街づくりでないのが印象的でした。自転車や歩行者も多く、水上交通も見直されて多様化していました。住み良い街づくりのためには、行政だけでなく住民も参加し、意見を合意させる活動が大事なようです。(日)

◆ 卒業旅行での、初のヨーロッパの地がアムステルダム。以来何回か旅したが、そのころはオランダ人の様々な智慧や日本との関わりについては、まったく興味を持たなかった。取材先へ毎日往復数時間のクルマの運転と、オランダ・ドイツ・ベルギーのジョークを飛ばし続けた後藤猛氏に感謝、感謝。(ゆ)

◆ 1970年代までの「オランダ病」が、いまは「オランダの奇跡」と呼ばれる。大きな政府だから経済が沈滞するというわけでもないらしい。取材すると、働くことも、子育ても、こんな国なら暮らしは楽だろうと思う。しかし、そのオランダにしても、増える一方の海外労働者を、寛容に受け入れ続けることに疑問があがっているという報道が流れている。かくも合意は悩ましい。(中)

◆ 今号でオランダ型合意形成を知り、我が家のスタイルと基本的に同じことに驚いた。ただし、夫婦間では多数決はありえない。結局、不特定多数の合意ではなく、一対一で向き合うことの積み重ねの上にこそ、本来の「話し合い」「多数決」が意味を持つことに気づかされる。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第19号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁断転載複製

発行日

2005年(平成17年)2月 (第二版 2011年(平成23)2月)

企画協力

沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授
嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 筑波大学大学院人文社会科学研究所教授

編集

吉田 稔 新美敏之 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川督明

発行

ミツカン水の文化センター
〒475-8585 愛知県半田市の中村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒104-0043 東京都中央区湊3-4-10 レジディア10F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506